

## 便秘薬の適正使用に向けた服薬状況の調査

サンユー薬局 / 皆川 淑哉 今井 真由美 高橋 雄大 にいがた調剤薬局 / 渡部 陽子

【目的】便秘症には食事性、痙攣性、弛緩性、薬剤性など様々な原因があり、便秘薬についてはその効果や長期連用の場合の有害事象等、不明瞭な点が多いと感じていた。そこで今回便秘薬の服用患者の状況を調査し分析することで、便秘薬の適正使用に向けた支援につなげることを目的とした。

【方法】2005年6月から8月の3ヶ月間に、センナ葉エキス、ピコスルファートNa、酸化マグネシウム、パントテン酸カルシウムを服用していた患者76名を対象に、便秘薬服用開始の理由、服用年数、服用方法、薬剤増量の状況や効果などを聴き取り及び薬歴管理簿より調査した。対象患者の内訳は男性24名、女性52名であり、平均年齢76.8±8.25歳であった。

【結果】まず便秘薬服用開始時の状況は、内服薬服用開始時からと消化器疾患発症後が各12%、脳梗塞発症後8%、その他7%、不明61%であった。そして平均服用薬剤数は一人あたり1.4剤で、センナ葉エキス単独の患者が40名と圧倒的に多く、次に酸化マグネシウム単独、酸化マグネシウムとパントテン酸カルシウムの併用が各10名という結果であった。

次に便秘薬の効果については「効いている」患者が「効かない」患者を有意に上回り( $p < 0.0001$ ,  $\chi^2$ -test)、服用を継続している間に「効果は変化がない」患者が「効くようになった」「効かなくなった」患者を有意に上回った( $p < 0.0001$ ,  $\chi^2$ -test)。また便秘薬を単剤服用している患者と多剤併用している患者とでは降下の満足度に差はみられなかった。

そして服用状況については連日服用している患者の方が頓服的に服用している患者より有意に多い( $p < 0.0001$ ,  $\chi^2$ -test)結果であった。また服用継続年数と効果の関係では、2年未満の服用群で「効果あり」が78.9%、「やや効果あり」が15.8%、「効果なし」が5.3%であるのに対し、10年以上の服用群では「効果あり」が70.5%、「やや効果あり」が5.9%、「効果なし」が23.5%であり、10年以上の服用群で「効果なし」の比率がやや多くなっている結果であった。さらに服用継続年数と処方変更率の関係をみると、2年未満で15.8%、2~5年未満で22.2%、5~10年未満で54.5%、10年以上で29.4%と、5~10年未満の変更率が高い傾向にあった。

【まとめ】今回の調査により便秘薬の長期連用の状況が示された。疾患を伴っている患者は、食事や運動が困難なケースが多く、薬剤に頼らざるを得ないと感じた。そして便秘薬の長期連用に伴い、効果が低減していくことが今回の結果からも示唆された。

以上の結果を踏まえて我々保険薬剤師は、患者の便秘の状況と薬の効果との関係を考察し、処方内容のチェックを行い、薬剤の選択について積極的に医師にアプローチしていく状況をつくり、また患者の状態を医師にフィードバックしながら支援していく必要があると考える。